

長野県更埴市

更埴条里水田址遺跡

—ふるさと農道建設に伴う発掘調査報告書—

1 9 9 6

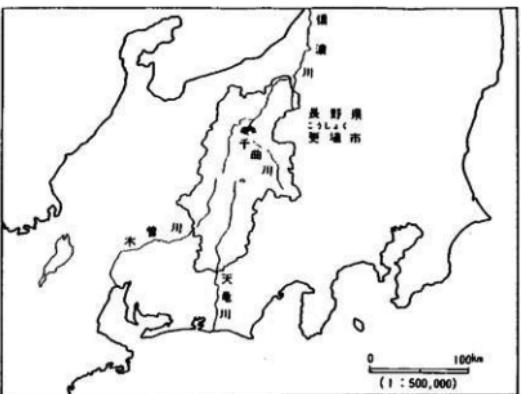
更埴市教育委員会

信州大学附属図書館



0720083948





例 言

- 1 本書は、平成6、7年度に更埴市教育委員会がふるさと農道建設に伴って実施した「更埴条里水田址遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 本書の編集及び執筆は、小野紀男が行った。
- 3 本書中の方位は、平面直角座標系第VII系の座標北を示す。また標高は海拔mで示した。
- 4 本調査に伴う、出土遺物・実測図・写真等の資料は、すべて更埴市教育委員会が保管している。なお、出土遺物には、更埴条里水田址遺跡を略して、平成6年度「KJ1」、平成7年度「KJ2」と記入されている。

目 次

例言・目次	
第1章 調査の概要	
第1節 概要	1
第2節 調査の経過	2
第3節 調査日誌	2
第2章 遺跡の環境	3
第3章 遺構と遺物	
第1節 平安時代以前の遺構と遺物	4
第2節 平安時代の水田跡	6
第4章 まとめ	13

写真図版

第1章 調査の概要

第1節 概 要

- 1 調査遺跡名 更埴 条里水田跡遺跡 (市台帳No.29)
- 2 所在地及び 地域名 更埴市大字雨宮、屋代、森
土地所有者 長野市大字南長野南郷町686-1番地 長野地方事務所
- 3 原因及び 公共事業によると農道建設に伴う発掘調査
事業委託者 長野地方事務所
- 4 調査の内容 発掘調査約900m² (平成6年度100m² 平成7年度800m²)
- 5 調査期間 発掘調査 平成6年度 平成6年12月1日～12月9日
平成7年度 平成7年4月13日～6月7日 11月14日～11月22日
整理調査 平成6年度 平成7年3月13日～3月21日
平成7年度 平成7年11月27日～平成8年3月21日
- 6 調査費用 4,225,000円 (平成6年度475,000円、平成7年度3,750,000円)
(全額事業者負担)
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会
担当者 佐藤信之 (平成6年度) 更埴市教育委員会
小野紀男 (平成7年度) 更埴市教育委員会
調査参加者 猿波久人 大井操子 岡田栄子 金井順子 久保啓子 小林千春
小林昌子 小松芳白 神戸富子 高野貞子 富沢豊延 中村文恵
西沢豊重 半田公子 半田なおゑ 堀内広人 宮崎恵子 村山 豊
事務局 安藤 敏 教育長 (~平成7年9月) 下崎文義 教育長 (平成7年9月～)
下崎 嶽 教育次長 山崎芳之 社会教育課長 下崎雅信 文化係長
矢島宏雄 岡田 勝 佐藤信之 小野紀男 文化係
委託等業者 重機 輸送武田組 基準点測量 (株)光陽測量
報告書印刷 信毎書籍印刷㈱
- 8 種別・時期 条里水田跡 平安時代
遺構・遺物 水田跡 平安時代 1面
竪穴住居跡 時期不明 1棟
溝 跡 時期不明 2基
土器片 弥生時代～中世 コンテナ1箱

第2節 調査の経過

平成5年3月、長野地方事務所より、ふるさと農道緊急整備事業に伴い更埴条里水田柱遺跡内の道路の拡幅を平成6年度に実施したいとの届出があった。平成5年12月、長野地方事務所と市教育委員会で協議が行われ、調査方法、時期等について協議が行われた。平成6年3月18日、県教育委員会を交えて改めて協議を行い、北側の集落跡が想定される部分については全面調査、南側の水田跡となる部分についてはトレーンチ調査で保護に当たることとなった。また、調査は平成6年5月に北側部分から開始することとなった。市教育委員会ではこれを受けて、調査の準備を開始した。

平成6年度に入り、長野地方事務所より北側部分の用地買収が完了していないため、この部分の調査は平成7年度に実施することとし、南側のトレーンチ調査を実施してほしいとの連絡があった。市教育委員会では調査計画の変更を行い、平成6年11月18日、長野地方事務所と更埴市との間に委託契約が締結された。12月1日から南側6か所のトレーンチ調査を開始し、12月9日終了した。各トレーンチとも予想した部分から畦畔が検出され、下層に遺構がなく調査を短縮できため、平成7年1月、調査費用の減額について、委託契約の変更を行った。

平成7年4月13日、平成7年度の発掘調査について委託契約が締結され、同日より北側の全面調査部分の調査を開始し、6月7日終了した。全面調査部分については、条里水田面の下層に集落跡の存在を想定していたが、調査の結果集落跡は検出されず、平成7年9月、調査費用の減額について委託契約の変更を行った。また、南側に残っていたトレーンチ調査部分については、11月14日調査を開始し11月22日終了した。いずれのトレーンチからも予想された位置から畦畔が検出された。

第3節 調査日誌

平成6年度	平成6年12月1日	重機による表土剥ぎ開始
	12月2日	作業員入り、検出開始
	12月6日	基準点測量実施
	12月9日	実測、埋め戻しを終え、現場における作業終了
平成7年度	平成7年4月13日	北側調査区の重機による表土剥ぎ開始
	4月17日	作業員入り、検出開始 南北小畦畔検出 調査機材搬入
	4月20日	基準点測量実施
	5月17日	1号大畦畔検出
	5月23日	2号大畦畔検出
	6月5日	調査機材搬出し、本日をもって作業員終了
	6月7日	埋め戻しを終え、現場における作業終了
	11月14日	トレーンチ調査部分の重機による表土剥ぎ開始
	11月15、16日	雨天のため作業中止
	11月17日	作業員入り、検出開始
	11月22日	実測、埋め戻しを終え、現場における作業終了

第2章 遺跡の環境

更埴条里水田址遺跡は、千曲川東岸の広大な自然堤防の南側に形成された後背湿地にあり、現在でも通称「崖代田んば」と呼ばれ、肥沃な田園地帯となっている。当該遺跡は、1961年から1964年にかけて、国内初ともいえる条里地割の総合学術調査が行われ埋没条里水田の存在が確認されて、その実態が明らかにされている。埋没条里水田面は馬口、北中原遺跡、(財)長野県埋蔵文化財センターにより行われた上信越自動車道建設に伴う発掘調査などにおいても確認され、条里あるいは坪を画する大畦畔、坪内を画する小畦畔が検出されている。これらの調査から、従来「長地・半折折中型」と理解してきた地割が「半折型」を基本とすることなど、いくつかの問題点が指摘されている。

また、自然堤防上は東西3.5km、南北1kmにわたって展開する更埴市内最大の遺跡群で、馬口、城ノ内、大境、灰塚遺跡等が含まれ、崖代遺跡群として把握されている。上信越自動車道建設に伴う発掘調査では、国内初の出土となった国府木簡の発見、地表下4~6mから縄文時代中期の集落跡の発見などがあり、崖代遺跡群に対する評価が大きく変わっている。

発掘調査地は、更埴条里水田址遺跡内のほぼ中央を南北に貫く長さ約1.5kmの道路部分であり、上信越自動車道建設地の東側約100mに位置している。



1. 馬口遺跡 2. 北中原遺跡 3. 城ノ内遺跡 4. 大境遺跡 5. 灰塚遺跡 6. 生仁遺跡

第1図 遺跡位置図 (1:20000)

第3章 遺構と遺物

調査地は更埴条里水田址遺跡のほぼ中央を南北に貫いているため、全面にわたって埋没条里水田面の検出が予想された。また上信越自動車道建設に伴う発掘調査結果から、調査予定地延長約1,500mの内、北側約220mについては、埋没条里水田面の下層に平安時代の集落跡の存在が想定された。そのため、この部分については予定地内の全面発掘調査を行い、残りの南側部分については条里水田の大畦畔が想定される部分のトレンチ調査を行った。大畦畔については、ほぼ予想された位置から検出できたが、下層遺構は予想に反して集落跡は検出されず、竪穴住居跡1棟、溝跡2基を検出したのみである。

第1節 平安時代以前の遺構と遺物

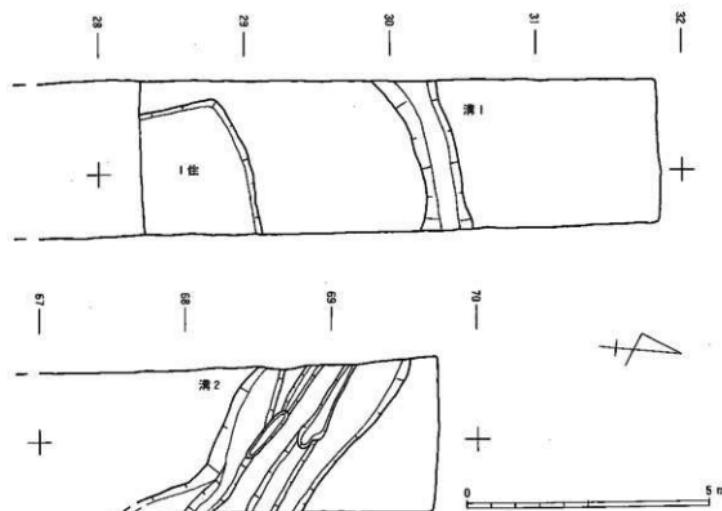
1号住居跡（第2・3図）

位 置：28、29区 規 模：不明 平面形：隅丸方形 主軸方向：N-15°-W

床 面：東側が調査区外、南側は下層遺構検出の際に堆土を置いてしまったため、全体の1/4程度を検出したのみであるが、ほぼ平坦であった。しかし、床面上に綺まりはなく軟弱であった。

壁：立ち上がりは約75°の角度を持ち、最大壁高25cmを測る。

遺 物：出土遺物はない。



第2図 下層遺構配置図

1号溝跡（第2・4図、図版1・6）

位置：30、31区

構造：（方向）N-70°-E （平面形）緩い弧を描く（断面形）逆台形（規模）幅0.8m 檜出面からの深さ15cmを測り、西から東にかけてわずかに傾斜している。断面は逆台形であるが、南北の立ち上がりはなだらかである。

覆土：条里水田構築土下の暗茶褐色土

を掘り込み、黒褐色の單一土層である。

遺物：弥生時代中期の遺物がわずかに

出土しているが、図化できるものは少ない。1、2は壺の破片と考えられ、1は器面に繩文を施し、列点文の下に楕円状に沈線を巡らせている。沈線の内部にも列点が見られ、沈線と沈線の間に刺突を施している。2は沈線と沈線の間に列点が見られる。3、4は甕の破片と考えられ、3には櫛描羽状文、4には横位の条痕文が見られる。

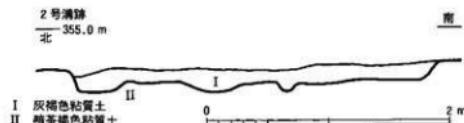
2号溝跡（第2・4図、図版1・6）

位置：67～69区 構造：（方向）N-62°-W （平面形）直線 （断面形）不定形 （規模）

幅3.1m 檜出面からの深さ20cmを測り、西から東にかけて傾斜している。底面は凹凸があり数本の溝が重なりあって見えるようにも見えるが、土層断面を見る限り判別はできなかった。

覆土：灰褐色の單一土層である。

遺物：弥生時代中期の遺物が出土しているが、出土量は少ない。1、2は共に甕の破片と考えられ、1には縦位の櫛描文が施されている。2は櫛描文の下に列点文が見られる。



第4図 1、2号溝跡及び出土遺物

第2節 平安時代の水田跡

条里水田面の大畦畔を検出するため、平成6年度に5か所（6-2～6トレンチ）、平成7年度に6か所（7-1～6トレンチ）のトレンチ調査を行った。北側の全面調査区からは2条の大畦畔を検出しており、検出した大畦畔は13条となっている。各大畦畔は表1に示したとおりであり、畦間の平均距離は108.6mとなっている。この水田面は、厚さ20～60cmの砂層下から検出されるもので、上部を覆う砂層は仁和4年（888）にこの地方を襲った大洪水によるものである。

また、非条里的地割を持つ中世の「斜行畦畔」を確認するため調査を行ったが（6-1トレンチ）「斜行畦畔」を検出することはできなかった。

6-4トレンチ（第6図、図版2）

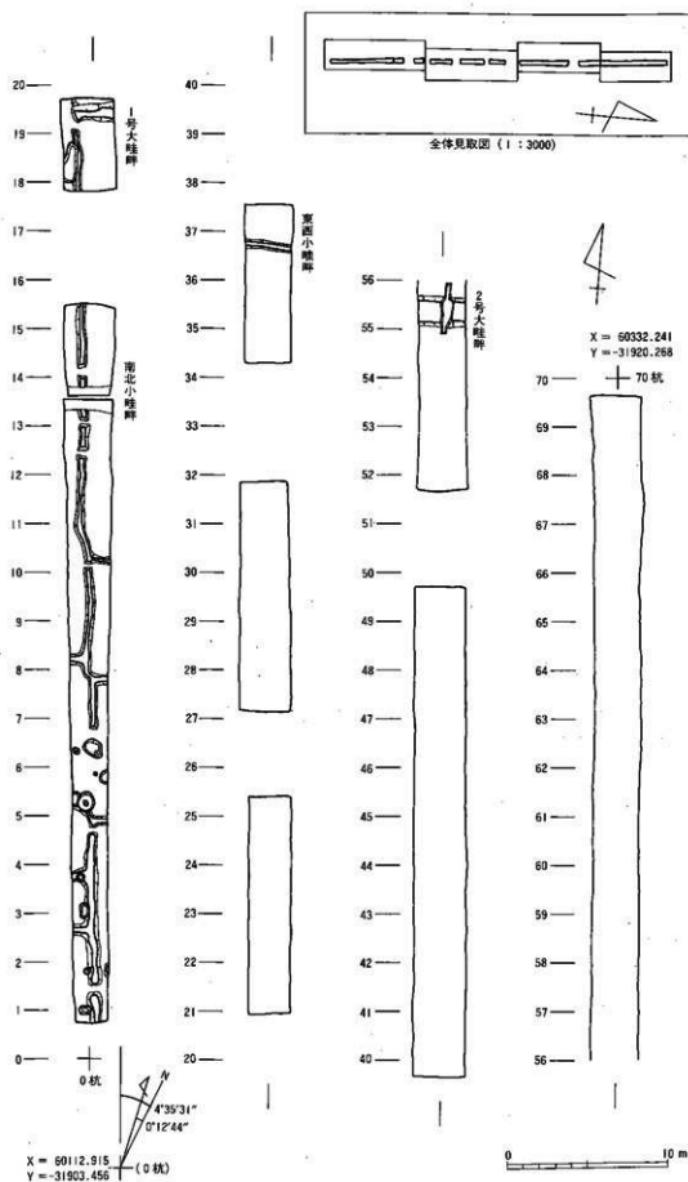
現地表下25cmから畦畔を検出している。上部を覆う洪沢砂層は畦畔部分で5cm程しかなく、水田面でも約20cmの厚さを測るのみである。この洪沢砂層は北に行くにつれてその厚みを増し、2号大畦畔付近では約60cmの厚さとなっている。水田面の標高は北側で354.3m、南側で354.2m前後である。

6-6トレンチ（第6図、図版3）

現耕作土と洪沢砂層の間に1面水田面が観察できる。畦畔の上面には凹凸が見られ、水田面の標高は北側で354.4m、南側で354.3m前後を測る。畦畔の下部には溝状の掘り込みが認められるが、覆土は畦畔構築土と同一のものであり、畦畔構築時に掘り込まれたものと考えられる。畦畔下の溝状掘り込みは、馬口遺跡、北中原遺跡で検出された大畦畔からも確認されている。出土遺物はない。

表1 大畦畔観察表

畦 畐	上面幅	下底幅	高さ	断面形	畦畔間距離	備 考
6-2トレンチ			15cm		106.5m	
6-3トレンチ	80cm	125cm	10cm	台 形	109.1m	
6-4トレンチ	60cm	100cm	20cm	かまぼこ形	109.9m	
6-5トレンチ		240cm	10cm		108.1m	
6-6トレンチ	85cm	130cm	20cm	台 形	109.9m	畦畔下に溝状落ち込み
7-1トレンチ	110cm	165cm	20cm	台 形	108.3m	
7-2トレンチ	160cm	200cm	15cm	台 形	109.2m	
7-3トレンチ	65cm	110cm	25cm	かまぼこ形	108.6m	
7-4トレンチ		135cm	5cm		111.9m	
7-5トレンチ	130cm	160cm	30cm	台 形	107.9m	
7-6トレンチ	130cm	170cm	20cm	台 形	106.0m	
1号大畦畔	60cm	105cm	25cm	かまぼこ形	107.6m	総合学術調査第408地点C東延長
2号大畦畔	130cm	170cm	25cm	台 形		総合学術調査第408地点北畦畔



第5図 条里水田面全体図（北側調査区）

7-1 トレンチ (第6図、図版3)

現地表下25cmから畦畔を検出している。畦畔断面は台形となるが、北側は緩く傾斜して行き、端部はあまり明瞭でない。水田面の標高は北側、南側共354.3m前後を測り、高低差はほとんどない。洪水砂の厚さは20cm程である。出土遺物はない。

7-2 トレンチ (第6図、図版4)

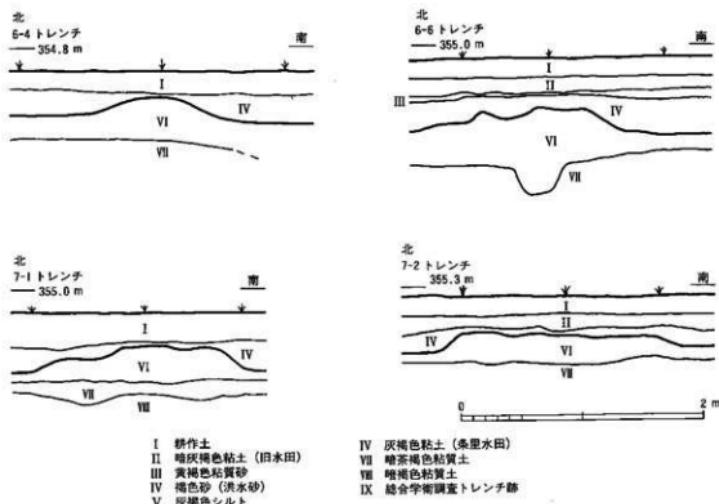
下底部の幅200cmを測る畦畔であり、今回の調査で検出した畦畔のうち特に大型の畦畔の一つである。現地表下30cmから畦畔を検出しており、6-6 トレンチ同様、耕作土と洪水砂の間に水田面が1面確認できる。水田面の標高は、北側で354.4m、南側で354.5m前後を測る。

7-5 トレンチ (第7図、図版5)

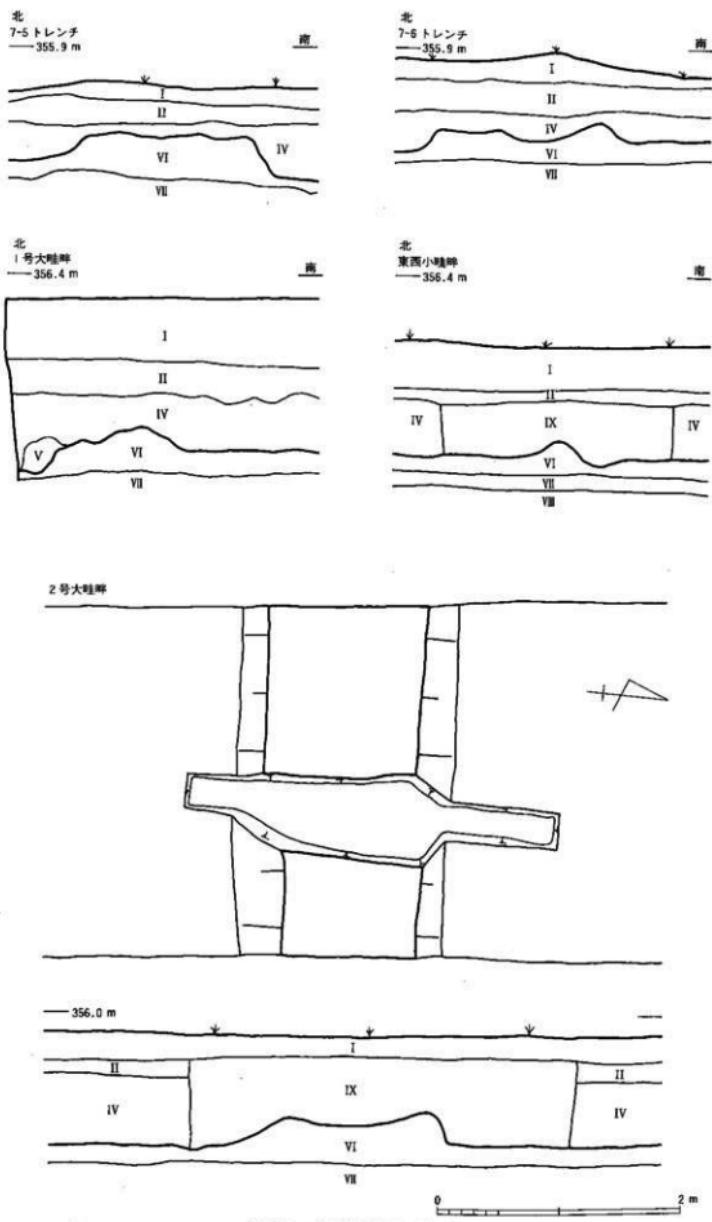
現地表下45cmから畦畔を検出しており、この辺りの洪水砂の厚さは50cmを測る。厚い洪水砂に覆われていたため、畦畔の残りは良好であり、高さは最大30cmを測ることができる。水田面の標高は北側で355.0m、南側で354.8m前後を測り、北側の水田面が南側の水田面より高くなっている。

7-6 トレンチ (第7図)

現地表下60cmから畦畔を検出した。断面形は台形であるが、中央部が窪み南側の端が一段と盛り上がりった形状をしている。水田面の標高は北側で355.1m、南側で355.0m前後を測る。



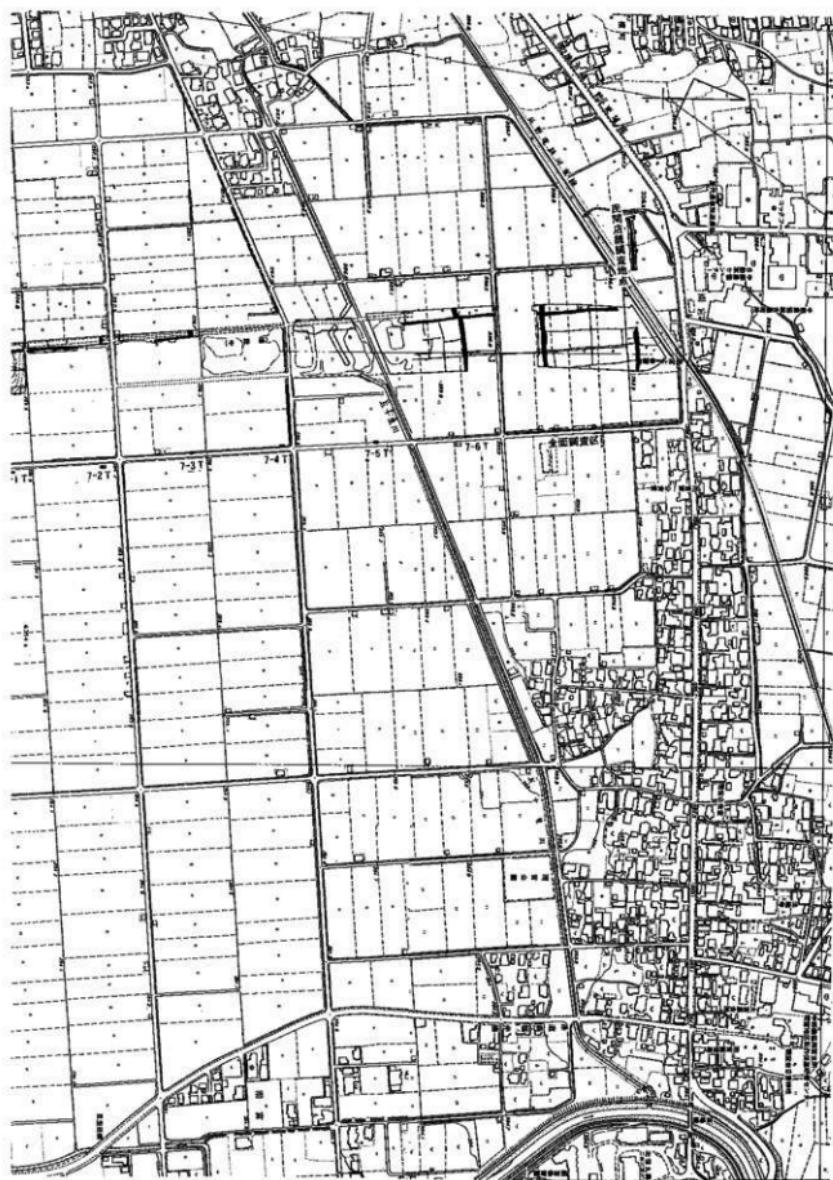
第6図 大畦畔断面図

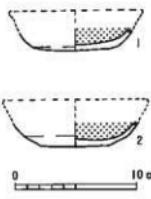


第7図 哉岬断面図及び平面図



第8図 調査地点位置図





第9図 2号大畦畔出土 遺物

1号大畦畔 (第7図、図版5)

19区より検出した畦畔である。総合学術調査の第408地点Cで検出された畦畔の東延長上にある。畦畔の南側には水田面が広がっているが、北側は溝状に落ち込んでいる。この落ち込みの北側は構造物があったため調査できなかったが、第408地点Cの調査結果から溝の両側に畦畔が並走する形態をとるものと考えられる。1号大畦畔から約40cmの間隔を開けて南北小畦畔が延びているが、この間隙は水口であると考えられる。

2号大畦畔 (第7・9図、図版5・6)

55区より検出した畦畔であり、第408地点北畦畔の一部を再検出したもので、調査区のはば中央に当たる付近では、洪水砂の厚さは約60cmに達している。水田面の標高は北側で355.0m、南側で354.9m前後を測る。

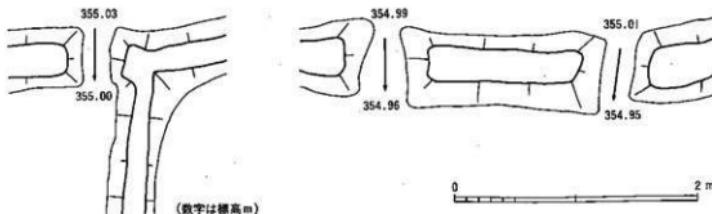
遺 物：畦畔構築土中より出土しているが、小破片が多く図化できたものは2点のみである。1、2は共に土器の杯で内面黒色処理され、底部には糸切り痕を残している。

東西小畦畔 (第7図、図版6)

36区より検出した畦畔で1号大畦畔、2号大畦畔を半折した畦畔である。1号大畦畔より52.0m、2号大畦畔より55.6mの距離を測る。断面形はかまぼこ形で下底部の幅30cm、高さ20cmを測り、畦畔の南側に深さ約5cmの溝状の落ち込みが認められる。また調査区西側の壁面には総合学術調査時のトレント跡が観察でき、畦畔の形状からして第408地点Eに当たるものと考えられる。水田面の標高は北側で355.0m、南側で354.9m前後を測る。

南北小畦畔 (第5・10図、図版6)

1～19区にかけて検出した畦畔で、この畔の内部を長地型状に区画している。方向はN-6°-W前後で、これまで確認してきた条里地割をなす畦畔と一致する。この南北小畦畔から東西両側に4条ずつ小畦畔が派生しているが、その間隔は一定していない。この畔内を半折する地点(2区付近)では1区で東側へ派生する畦畔、2区で西側へ派生する畦畔を検出しているが、東西方向へ延びる畦畔には約3mの食い違いが見られる。水回しはこれまでの調査結果と同様に「畦越し配水」であり、畦畔の所々に水口が開口している。水口は畦畔の交差部分で開口するもの、畦畔の途中で開口するものがある。12、13区で検出した水口は、その間隔が2m程しかなく1枚の水田に複数の水口があったことがわかる。水田面からわずかに遺物が出土しているが、図化できるものはない。



第10図 水口の形態

第4章 まとめ

今回の調査で検出した東西方向の大畦畔は13条に及ぶ。これは、上信越自動車道建設地の調査で検出された大畦畔数に匹敵するもので、更埴条里水田址遺跡の地割の正確さを改めて確認することができた。また調査地内には、総合学術調査の第408地点北畦畔の一部が含まれていることが調査開始前から指摘され、その痕跡を検出すると共に第408地点Eの一部をも検出することができた。これにより、第408地点の調査位置を推定することが可能になったと考えられる。以下、これまでの調査成果をもとに課題を提起し、まとめとしたい。

1 条里地割について

今回検出した南北小畦畔は、総合学術調査の成果から第408地点西畦畔の延長上から約11m程の間隔をもって作られていることが推定される。この坪を半折する地点付近で検出した畦畔は、南北小畦畔との交差部分で約3mの食い違いが認められ、これを半折畦畔とするには疑問が残る。

一方、上信越自動車道建設地、更埴条里水田址高月地点、馬口、北中原遺跡等の調査結果から、これまで「長地半折折中型」とされていた地割が「半折型」であるとの結果が得られている。更埴条里水田址高月地点調査担当者は「南北方向の小畦畔は一段を2等分する畦畔で、部分的にこうした長地型状に地割したものと見られる。」と述べ、更埴条里水田址の条里地割は「半折型」を基本とし、部分的に長地型状に分割されている、としている。本調査地は幅3m、長さ220mの南北に細長いトレント調査であったため、南北小畦畔が検出された坪の全体像を把握することはできなかったが第408地点の調査成果と合わせると、この坪は長地型状の地割を行っていたものと考えられる。

また、第408地点で想定された坪と、馬口遺跡周辺で想定された坪の間には、東西方向に約30mのズレがあることが指摘されている。上信越自動車道建設地で検出された南北方向の「大畦」と南北小畦畔との間隔は145m前後を測り、逆算すると第408地点西畦畔と「大畦」の間隔は135m前後になり、馬口遺跡周辺で得られた結果と同様に約30mのズレが想定される。

2 灌水方法について

これまでの調査結果から更埴条里水田址における灌水は、水口を介して田から田へと行われる「畦越し配水」とされ、本調査においてもそれを裏付けるように水口が検出されている。水口の開口する位置は、畦畔の交差部分で開口するもの、畦畔の途中で開口するものの2種類を検出している。また1枚の水田にあまり間隔を置かず複数の水口が開口する例も見受けられた。更埴条里水田址高月地点で検出されたような、坪を画する畦畔を越えての灌水状況は確認できなかったが、1号大畦畔の西側部分には畦畔の盛り上がりがなく、この部分が水口にあたる可能性がある。

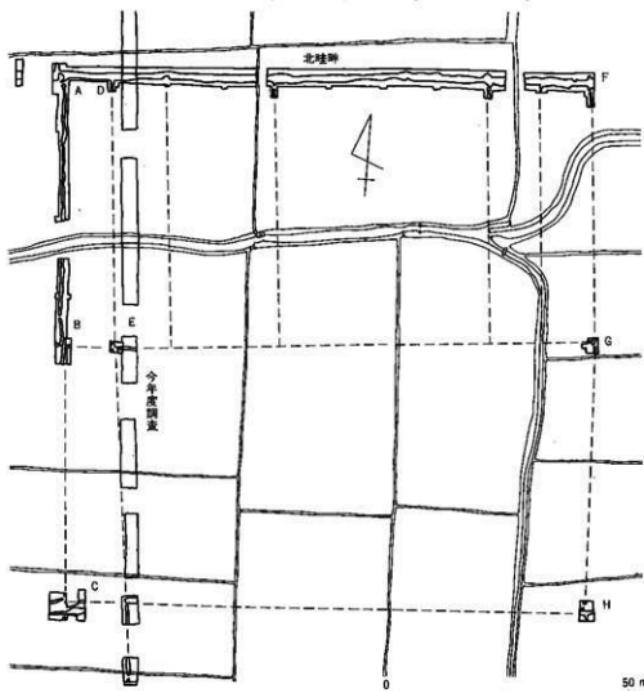
用水路と考えられる溝は、上信越自動車道建設地の調査で検出されているが、本調査では用水路と考えられる溝は検出していない。ただし、1号大畦畔のように2条の溝が並走し、その間に溝が走る形をとるもののが用水路としての機能を果たしていたのではないだろうか。

3 条里水田面下層の遺構について

上信越自動車道建設地の発掘調査によると、五十里川以北の地点では条里水田面の下層に平安時代前期の集落跡が検出されている。この調査結果に基づき、北舞全面調査区で下層遺構の検出を行ったが、集落跡は検出されなかった。上信越自動車道建設地で検出された集落跡は、「島状の微高地」に形成されていたと指摘されており、この微高地は本調査地点までは達していないものと考えられる。

参考文献

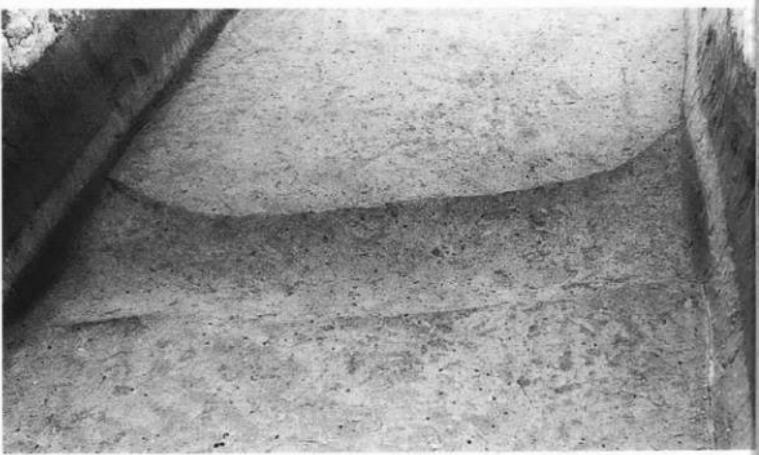
長野県教育委員会	「地下に発見された更埴市条里遺構の研究」	1968年
(財)長野県埋蔵文化財センター	『長野県埋蔵文化財センター年報 8』	1991年
同	『長野県埋蔵文化財センター年報 9』	1992年
更埴市教育委員会	『馬口遺跡』	1986年
同	『馬口遺跡III』	1988年
同	『馬口遺跡IV』	1989年
同	『馬口遺跡V』	1991年
同	『馬口遺跡VI』	1992年
同	『北中原遺跡』	1987年
同	『北中原遺跡II』	1988年
同	『更埴条里水田址高月地点遺跡』	1995年



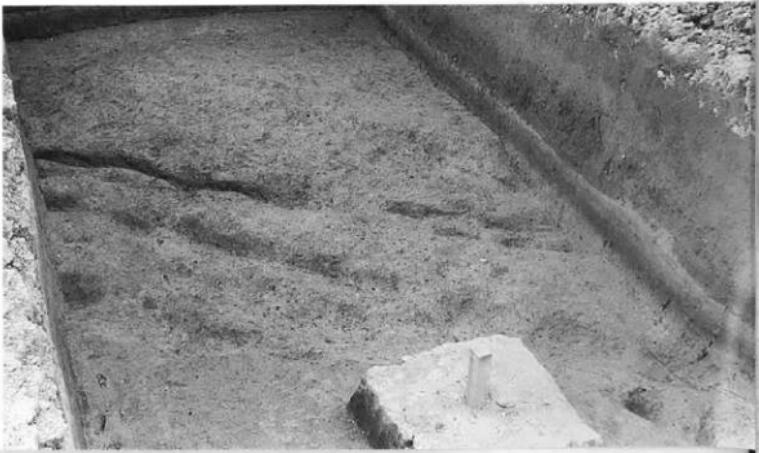
第11図 第408地点畦畔配置図
（「地下に発見された更埴市条里遺構の研究」より）



調査前風景



1号溝跡



2号溝跡

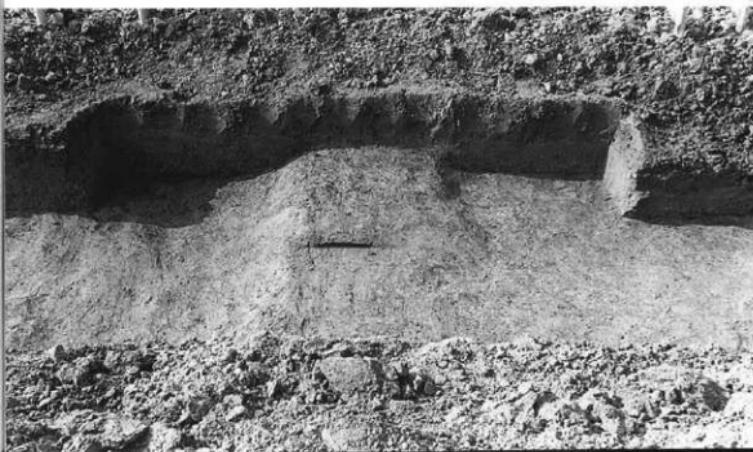
図版 2



6-2トレンチ



6-3トレンチ



6-4トレンチ



6-5トレンチ

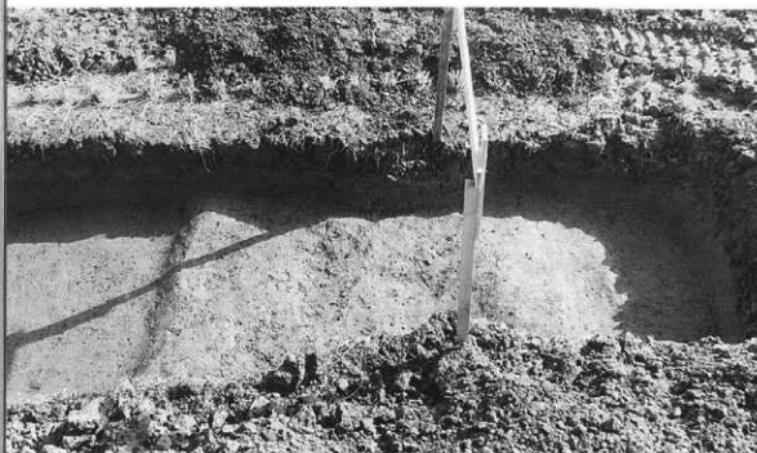


6-6トレンチ



7-1トレンチ

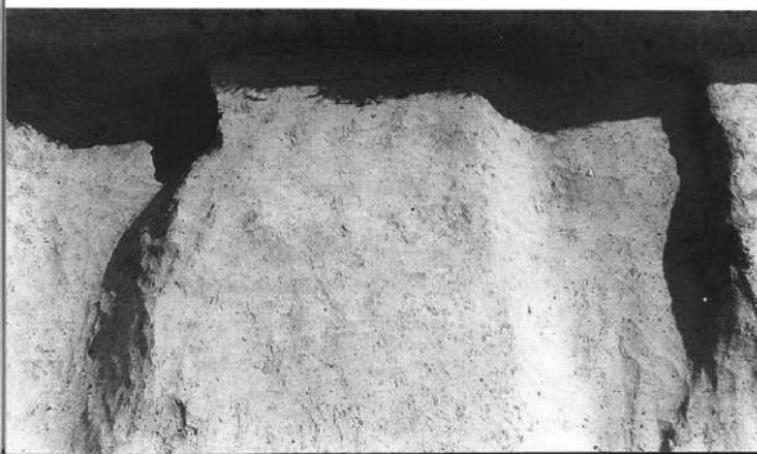
図版 4



7-2トレンチ



7-3トレンチ



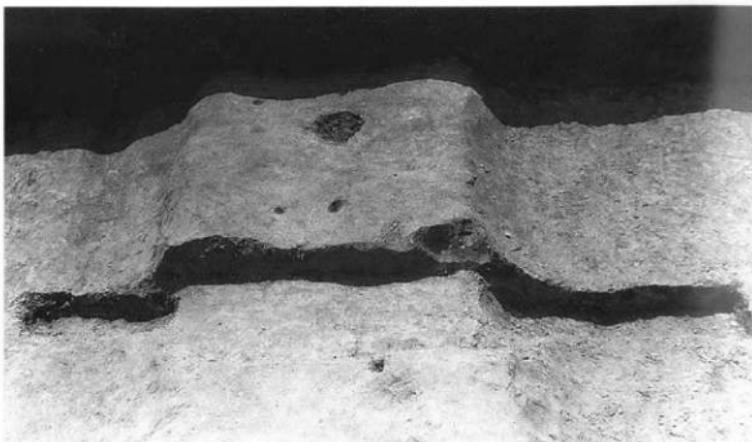
7-4トレンチ



7-5 トレンチ



1号大畦畔



2号大畦畔



東西小畦畔



南北小畦畔

溝跡出土土器



2号大畦畔出土土器



報告書抄録

ふりがな	こうしょくじょうりすいでんしいせき							
書名	更埴条里水田址遺跡							
副書名	—ふるさと農道建設に伴う発掘調査報告書—							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	小野紀男							
編集機関	更埴市教育委員会 社会教育課 文化係							
所在地	〒387 長野県更埴市杭瀬下84番地 Tel.026-273-1111							
発行年月日	1996年3月22日							
所 有 者 名 所 有 遺 跡	所 在 地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
市町村	遺跡番号	。	。	。	。	。	。	
こうしょくじょうり 更埴条里 すいだんし 水田址	長野県更埴市 大字雨宮、 屋代、森	20216	29	36度 32分 13秒	138度 8分 38秒	第Ⅰ次 1994.12.01～ 1994.12.09 第Ⅱ次 1995.04.13～ 1995.06.07 1995.11.14～ 1995.11.22	第Ⅰ次 100 第Ⅱ次 800	ふるさと農 道建設に伴 う発掘調査
所 有 者 名 所 有 遺 跡	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
更埴条里 水田址	水田址	平安時代	水田跡 1面 坪を画する畦畔 13条 坪を半折する畦畔 1条 段を画する畦畔 1条	土師器、須恵器	更埴条里水田址の中央 を南北に縦断。 1961～1964年に調査さ れた総合学術調査の第 408地点再検出			
		平安時代 以前	豎穴住居 溝跡	1棟 2基	弥生時代中期土器片			

更埴条里水田址遺跡

発行日 平成8年3月22日
 発行 更埴市教育委員会
 〒387 長野県更埴市杭瀬下84番地
 電話 (026)273-1111
 印刷 信毎書籍印刷株式会社
 〒381 長野県長野市西和田470
 電話 (026)243-2105

